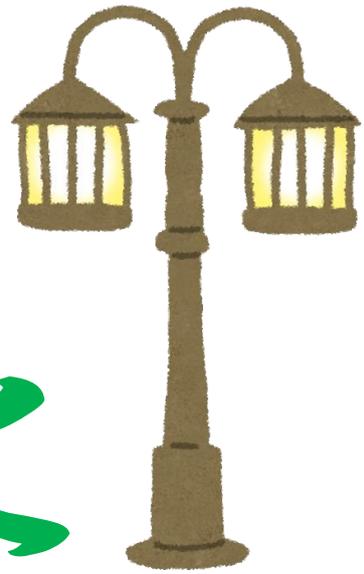


光

と

文化



松明（たいまつ）や蠟燭（ろうそく）、影絵、
絵画など、光や明かりを取り入れた多様な文化
について紹介します。

『人を動かす照明術 —歴史に学ぶ「こころ一番」での光の使い方—』
結城未来／著 ソフトバンククリエイティブ

フェルメールの室内画は、左側からの窓から光が差し込んでいる絵が多い。なぜ左側からの光なのかは明らかになっていないが、「澄み切った静けさ」を感じさせる。

歴史上の有名人たちが、自然光を含めた当時の照明をどう使いこなして成功したか、彼らの照明術を現代に生かす方法を提案する。

『灯火器百種百話』

滝沢寛／著 矢来書院

ろうそくが一般に普及したのは、国産の和ろうそくが作られた江戸時代になってから。そして、ろうそくのおかげで燭台やちょうちんなどが普及した。

時代とともに変わっていく灯火器を一種一話で紹介する。

『影絵をつくる』

後藤圭／著 大月書店

「影踏み」や「指影絵」などの影遊びは、みなさんも楽しい思い出としてきっと心の中に残っていることでしょう。

その影の持つおもしろさや意外性を活用した影絵クイズや指影絵の遊び方、また影絵劇の製作方法などを紹介する。

『源氏の明り』

尾崎左永子／著 求竜堂

「夕顔」の巻では、「夕顔」の花そのものが「夕」と「花の白い光」とのいいよりのない光と影の対比の中に美しさを増す花だけに、その花のいのちのはかなさ、「夕顔の女」のいのちのはかなさを含めて、微妙な「明り」のあやを織り出している。

王朝びとの心理の深層に触れる「明り」を解説。

編集・発行：さいたま市立与野図書館 平成30年7月

さいたま市中央区下落合5-11-11 TEL 048-853-7816 FAX 048-857-1946